

ピントリッキオ作ブファリーニ礼拝堂装飾壁画研究

—ローマ、サンタ・マリア・イン・アラチェリ教会における

シエナの聖ベルナルディーノの称揚について

荒木 文果（九州大学大学院）

サンタ・マリア・イン・アラチェリ教会にはシエナの聖ベルナルディーノ(1380-1444)に捧げられたブファリーニ家礼拝堂がある。本礼拝堂壁面の聖人伝連作にあたったのは、ピントリッキオ、すなわち15世紀末から16世紀初めに、5名の教皇、聖職者や在俗の富裕層によって数々の壁画装飾を依頼されたペルージャの画家であった。注文主はニコロ・ディ・マンノ(1430/40-c. 1506)で、ローマで書記官として働いていた法学者である。

従来、本礼拝堂装飾壁画に関しては、制作年代や画家の工房における協力者の役割など様式論的議論が中心であった。また、その図像学的側面に関しても主にアラスやラリックらによってある程度明らかにされている。さらに近年ラ・マルファによって、本礼拝堂におけるグロテスク装飾と描かれた建築要素が生み出す空間的統一性の歴史的意義が喚起された。それに対して本発表では、聖人伝の図像表現に再び目を向け、聖人がローマにおいて異端審問にかけられた事実に留意しつつ、次の二点を中心に新たな解釈を提示する。

一点目は、東壁面上段ルネッタ部分に描かれた《隠遁を試みる聖ベルナルディーノ》の主題についてである。聖人は隠遁生活を途中で断念したために、通常本主題が絵画化されることはない。一方、ルネッタの聖人には、隠遁を主題とした伝統的な図像表現が踏襲され、実際の逸話を再現する意図で制作されていないことが分かる。画面では聖人を指し示す男性を中心に聖人と男性群が対置され、とりわけ目立つ位置に異教徒が描かれている。当時キリスト教国の平和実現のために、異教徒は不信人者として改宗させるべき対象であったが、本画面における隠者と不信心者の対置から想起されるのは、隠者が不信人者を改心させるという中世以来の思想である。さらに聖人が語る説話、聖なる場面を異教徒に指差す構図がみられるシステリーナ礼拝堂の《キリストの洗礼》との比較、異教徒のポーズ等の検討により、本ルネッタの真の主題は、不信心者の改心、特に異教徒の改宗であると考えられることを明らかにする。

二点目は、祭壇壁面の《聖ベルナルディーノの栄光》において聖人と共に冠が描かれるという図像的特異性についてである。発表では、冠を捧げる天使が百合の花を持つ点に注目し、百合と冠を携える天使のモチーフが通常聖母の頭上に描かれるものであることを指摘する。祭壇壁面における両聖人の視覚的繋がり、画家の徒弟が制作したサンタ・トリニタ教会のフレスコ画によっても裏付けられる。さらに聖人の説教において、実際に彼自身が聖母との繋がりや彼の聖母への信仰を聴衆に語っていることを確認する。それによって本祭壇壁面においては、聖母を篤く信仰しその加護のもとにあった聖人像が示されていると共に、聖母のアトリビュートを意図的に用いることで、かつて異端視された聖人の記憶が覆われ、その正統性が表明されている可能性に言及する。